

NEW JAPAN
*P*HILHARMONIC
SUMIDA, TOKYO

新日本フィルハーモニー交響楽団
2024/2025シーズン

1 2

January, 2025

February, 2025



YUTAKA SADO

2024/2025 シーズン
新日本フィルハーモニー交響楽団 1, 2月演奏会

Contents

トリフォニーホール・シリーズ/サントリーホール・シリーズ #660 相場ひろ	1
すみだクラシックへの扉 #28 小室敬幸	7
フォーレ：レクイエム op. 48 歌詞対訳	14
楽員ストーリーズ ④5 玉井 元 (第2ヴァイオリン)	19
NJP from Inside	20
NJP 3月公演 柴田克彦の鑑賞ポイント	23
2025 / 2026シーズン 定期演奏会プログラム	24
お客様からの声	29
室内楽シリーズ	31
「パトロネージュ・システム」のご案内	38

■特別支援企業

オリックス

in 鹿島

CCC

大和証券

東京東信用金庫

NOMURA

フジサンケイグループ

三井住友銀行

■特別支援団体

公益財団法人 オリックス宮内財団

特別支援企業/団体は、新日本フィルの運営を支援しています。

Triphony Hall Series
Suntory Hall Series
2024-2025 Season

#660

1.25 [土]

トリフォニーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
トリフォニーホール・シリーズ 第660回定期演奏会
2025年1月25日(土) 14時00分
すみだトリフォニーホール

1.26 [日]

サントリーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
サントリーホール・シリーズ 第660回定期演奏会
2025年1月26日(日) 14時00分
サントリーホール

<指揮者によるプレトーク>

● マーラー (1860-1911)

交響曲第9番 二長調

約80分

Gustav Mahler: Symphony No. 9 in D major

- I. アンダンテ・コモド
Andante comodo
- II. ゆったりしたレントラーのテンポで。いくぶん不器用に、きわめて粗野に
Im Tempo eines gemächlichen Ländlers. Etwas täppisch und sehr derb.
- III. ロンド＝ブルレスケ：アレグロ・アッサイ きわめて頑なに
Rondo-Burleske: Allegro assai. Sehr trotzig.
- IV. アダージョ：非常にゆっくりと、控えめに
Adagio. Sehr langsam und noch zurückhaltend.

※本公演は休憩がございません。

<コンサートの感想をお寄せください>

演奏会終了後1週間以内に回答いただいた方の中から、抽選で10名様に新日本フィルよりグッズをプレゼント!

QRコードを読み込み、WEBにてお答えください。プレゼントの当選者にはメールにてご連絡させていただきます。



@njp.or.jpからのメールが受信できるようにご設定をお願いいたします。

<https://www.njp.or.jp/qs>

いただいたお声は次号以降の定期演奏会プログラムなどでご紹介させていただく可能性がございます。ご了承ください。

[指揮] 佐渡 裕

Yutaka Sado, Conductor

[コンサートマスター] 崔(チェ)文洙

Munsu Choi, Concertmaster

[アシスタント・コンサートマスター] 立上 舞

Mai Tategami, Assistant Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催：すみだトリフォニーホール [1/25公演]

■特別協賛：オリックス株式会社/公益財団法人オリックス宮内財団

■助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
独立行政法人 日本芸術文化振興会

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

演奏会アンケートは
こちらから
<https://www.njp.or.jp/qs>



オリックス株式会社
公益財団法人 オリックス宮内財団





©Peter Rigaud c/o Shotview Artists

佐渡 裕 [指揮] Yutaka Sado, Conductor

京都市立芸術大学卒業。1987年アメリカのタングルウッド音楽祭に参加後、故レナード・バーンスタイン、故小澤征爾らに師事。89年新進指揮者の登竜門として権威あるブザンソン国際指揮者コンクール優勝。95年レナード・バーンスタイン・エルサレム国際指揮者コンクールで優勝し、「レナード・バーンスタイン桂冠指揮者」の称号を授与される。

これまでパリ管弦楽団、ベルリン・ドイツ交響楽団、バイエルン国立歌劇場管弦楽団、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、ロンドン交響楽団、NDRエルプフィルハーモニー管弦楽団など、欧州の一流オーケストラに多数客演を重ねてきた。2015年よりオーストリアで110年以上の歴史を持つトーンクンストラ管弦楽団音楽監督に就任し、現在欧州の拠点をウィーンに置いて活動している。海外のオペラ公演でも実績を重ねており、2003年「エクサンプロヴァンス音楽祭」での『椿姫』（演奏：パリ管弦楽団）、07年「オランジュ音楽祭」でのブッチーニ『蝶々夫人』（演奏：スイス・ロマン管弦楽団）、トリノ王立歌劇場では10年ブリテン『ピーター・グライムズ』、12年『カルメン』、15年2月に『フィガロの結婚』を指揮。

国内では現在兵庫県立芸術文化センター芸術監督、新日本フィルハーモニー交響楽団音楽監督、シエナ・ウインド・オーケストラ首席指揮者、「サントリー1万人の第九」総監督を務める。

CDリリースは多数あり、最新盤はトーンクンストラ管との21枚目となる『マーラー：交響曲第7番』を2024年10月にリリース。著書に『僕はいかにして指揮者になったのか』（新潮文庫）、『棒を振る人生～指揮者は時間を彫刻する～』（PHP新書）、絵本『はじめてのオーケストラ』<絵：はたこうしろう>（小学館）など。出光音楽賞（1991年）、モンブラン国際文化賞（2003年）、渡邊暁雄音楽基金音楽賞（2003年）、岩谷時子賞（2014年）、文部科学大臣表彰（2024年）などの受賞歴がある。

オフィシャルファンサイト：<http://yutaka-sado.meetsfan.jp>

1910年9月にミュンヘンで行われたグスタフ・マーラー（1860～1911）の交響曲第8番変ホ長調の初演は、二日間で6000枚用意されたチケットも完売し、終演後も30分以上喝采が続くなど、大成功を取めた。作曲家マーラーは既に熱狂的な信者を持ち、その新作は多くの人から待ち望まれていたけれども、交響曲第8番の興行的な成功は桁外れのものであり、演奏会を仕切った興行師のエミール・グートマンや、マーラーと出版契約を交わしていたユニヴェルザール社は2匹目のドジョウを狙って、当時既に完成していながらも初演の予定が立っていなかった新作「大地の歌」と交響曲第9番ニ長調をプログラムに掲げた演奏会をマーラーに提案する。しかし彼は自らの疲労と、当時音楽監督を務めていたニューヨーク・フィルハーモニックでの職務を理由に首を縦に振らず、他の指揮者に初演を任せることも拒絶した。

同年末、彼はニューヨークから、ユニヴェルザール社の社長であるエミール・ヘルツカに書き送っている。「私の新しい楽譜は、私が出版認可を出さない限り、極秘扱いとみなすことをお願いしたい。新作の楽譜に誰かが触れたり、持ち出したりすることがあったなど、私には理解できません。」どうやら交響曲第8番の成功に味をしめたヘルツカからは、マーラーの渡米中にヨーロッパで第9番なり「大地の歌」なりの初演を別人の指揮で行うことを画策し、演奏の可能性を探って出版前の楽譜をいく人かに閲覧させていたらしい。さらに翌11年2月、彼はいまいちどヘルツカに手紙を書いている。「こんな企画をでっち上げたり、公言したりした人が誠実であるとは思えないと、もういちど言わせてください。何よりお願いしたいのは、出版のためにお渡しした私の作品については、出版されるその日まで、誰に対しても口をつぐんでいただくことです。」彼のひととなり、およびリハーサルの間中も楽譜に手を入れ続けるという自作の初演の進め方を熟知していれば、彼が他人の手になる初演など許可するはずもないことは分かりきっていたはずだが、それでもこうした話が出るのは、それまで毀誉褒貶の激しかったマーラーの交響曲に、にわかに注目が集まるようになったことと無縁ではないだろう。

注目すべきはマーラーの新作指揮への意欲である。ヘルツカへの最後の手紙が書かれたのは、体調不良のために生涯最後の舞台となったニューヨーク・フィルハーモニックの演奏会が行われた1911年2月21日のことであった。この後彼の体調は悪化の一途をたどり、ヨーロッパに戻って同年5月18日にはウィーンで息をひきとることになる。交響曲第9番については、自らの

死を意識した作品と言われることも多いけれども、少なくとも彼は、体調の悪化にもかかわらず、おそらく死の直前まで自分が初演を指揮することを信じて疑わなかったことであろう。結局彼は後を託す誰かを指名することもなく逝去し、少なからぬトラブルを経て、「大地の歌」はミュンヘンで同年11月20日にブルーノ・ワルターが初演し、交響曲第9番はやはりワルターが、翌12年6月26日にウィーン・フィルハーモニー管弦楽団を指揮して初演したのだった。

■ マーラー: 交響曲第9番 二長調

作曲の経緯 ▶ グスタフ・マーラーが自ら完成させた最後の交響曲である交響曲第9番二長調は、おそらく1908年夏にスケッチが書き始められ、翌09年夏には全曲の草稿が完成された。その後彼はニューヨーク・フィルハーモニックの音楽監督としての職務を果たすために同年10月にはニューヨークに渡る。シーズン中は作曲の筆を休めるのがマーラーの習慣であったが、彼はニューヨークで推敲と浄書を続け、1910年4月には全曲の管弦楽総譜が完成した。この楽譜はシーズン終了後にヨーロッパに戻ったマーラーが、契約を交わしていたユニヴェルザール社に預けた。

マーラーシンフォニーのなかの9番 ▶ 多数の合唱と8人の独唱を要し、祝祭的な気分を強く打ち出した交響曲第8番変ホ長調に対して、第9番は交響曲第4番ト長調に近い、親密な性格を持つものになったと、作曲中のマーラーは親交のあった指揮者ブルーノ・ワルターに手紙で書き送っている。この曲は両端楽章が共に緩いテンポにより、中間にふたつの舞曲楽章を置くという特異な楽章構成を持つ一方で、管弦楽編成は大規模な4管編成ながらごく一般的であり、交響曲第6番イ短調のカウベルやハンマー、交響曲第7番ホ短調のギターやマンドリンのような特殊楽器を伴わない。

第1楽章 アンダンテ・コモド

曲の構成と音楽の特徴 ▶ ソナタ形式によるとも、ふたつの主題に基づく二重の変奏曲とも解釈することができる。これは伝統的なソナタ形式に対して、主題の扱い方や調性関係の構成がきわめて独特で、古典的な形式感にあてはまらない点が多いためである。まず短い序奏ではチェロとホルンの応答によるリズム動機やハーブの奏する息の短い動機、弱音器をつけたホルンが強奏する動機が次々にあらわれるが、これらはみな、楽章全体を通じて重要な役割を演じる。その後第2ヴァイオリンが歌い始める歌謡的な主

題が第1主題にあたる。(この冒頭は「大地の歌」第6楽章結尾で「永遠に」と歌われる楽句の引用と解される。)第1主題提示後ただちにあらわれる第2主題はより熱を持ち、決然とした調子を帯びる。第2主題は音楽を高揚に導くが、その頂点であらわれる動機も第3主題と解せるほどに重要である。冒頭のリズム動機の回帰で始まる展開部は、主題提示よりはるかに長大で、動機や主題はさかんに立ち帰り、さまざまに変容していく。再現部を経てコーダは消え入るように終わる。

第2楽章 ゆったりしたレントラーのテンポで。いくぶん不器用に、きわめて粗野に

レントラーとは3拍子によるドイツの民俗舞踊で、19世紀に流行したワルツと同様に、中世から農民の間で踊られていたヴェッラー舞曲を起源とする。ここではテンポの緩い田舎風のレントラーと、ワルツ風のよりテンポの速く潑刺とした舞曲、そしてノスタルジックな色合いを帯びたもうひとつのレントラーの、三つの舞曲が入れ替わり立ち替わりあらわれる。

第3楽章 ロンド＝ブルスケ:アレグロ・アッサイ きわめて頑なに

ブルスケとは、おどけた調子のユーモラスな性格を持つ舞曲のことだが、ここでのマーラーの音楽はユーモラスと言うよりは辛辣と言うべきだろう。ロンド形式をとり、トランペットと弦楽器の応酬で鋭く始まった後、曲想は攻撃的なものから夢幻的なものまで、目まぐるしく入れ替わっていく。各主題がそれぞれに変容を続けるのに加えて、フガートなどの対位法的な書法が張り巡らされていて、騒乱とも言える響きは緻密な書法に支えられている。

第4楽章 アダージョ:非常にゆっくりと、控えめに

強く訴えかける短い序奏は、第3楽章途中にあらわれた夢幻的なエピソードと強い関連を持つ。続く主要主題は第1楽章第1主題を変形したものである。楽章全体はこの主題と、まずファゴットで予告され、その後コントラファゴットとチェロにあらわれる副次的な主題にもとづく二重の変奏曲と考えられる。ふたつの主題は登場するごとに変形を重ね、音楽は第1主題の変奏とともに大きなクライマックスを迎える。その後次第に音楽は遅く、弱くなっていき、消え入るように終わる。

[楽器編成]フルート4、ピッコロ、オーボエ4(イングリッシュホルン持替)、クラリネット3、Es管クラリネット、バスクラリネット、ファゴット4(コントラファゴット持替)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、太鼓、シンバル、小太鼓、トライアングル、タムタム、グロッケンシュピール、プレートゴング、ハーブ2、弦楽5部。



緑はつづく。想いはつづく。

GREEN KAJIMA

100年をつくる会社
鹿島



「GREEN KAJIMA」の詳細記事はこちら



1.31 [金] 2.1 [土]

すみだクラシックへの扉

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会 すみだクラシックへの扉 第28回

2025年1月31日(金)14時00分 すみだトリフォニーホール
2月 1日(土)14時00分 すみだトリフォニーホール

<指揮者によるプレトーク>

●イベール (1890-1962)

室内管弦楽のためのディヴェルティスマン

約15分

Jacques Ibert: Divertissement pour orchestre de chambre

I. 序曲 Introduction II. 行列 Cortège III. 夜想曲 Nocturne IV. ワルツ Valse
V. パレード Parade VI. フィナーレ Finale

●アルチュニアン (1920-2012)

トランペット協奏曲 *

約15分

Alexander Arutiunian: Trumpet Concerto *

—— 休憩20分 ——

●フォーレ (1845-1924)

レクイエム op. 48 **

約40分

Gabriel Fauré: Requiem, op. 48 **

I. イントロイトゥス(入祭唱)とキリエ Introit et Kyrie
II. オッフエルトリウム(奉献唱) Offertoire
III. サンクトゥス(聖なるかな) Sanctus
IV. ピエ・イエス(慈悲深きイエスよ) Pie Jesu
V. アニュス・デイ(神の小羊) Agnus Dei
VI. リベラ・メ(私を解き放って下さい) Libera me
VII. イン・パラディスム(楽園に) In Paradisum

[指揮] 佐渡 裕

Yutaka Sado, Conductor

[トランペット] 山川永太郎 (NJP首席トランペット奏者) *

Eitaro Yamakawa (Principal Trumpet, NJP), Trumpet *

[ボーイソプラノ] 1/31(金) 中田憲吾 (TOKYO FM少年合唱団) **

Kengo Nakata (TOKYO FM BOYS CHOIR), Boy Soprano **

2/1(土) 伊藤健司 (TOKYO FM少年合唱団) **

Kenji Ito (TOKYO FM BOYS CHOIR), Boy Soprano **

[バリトン] キュウ・ウォン・ハン **

Kyu Won Han, Baritone **

[合唱] 栗友会合唱団 ** [合唱指揮] 栗山文昭 **

Ritsuyukai Choir, Chorus ** Fumiaki Kuriyama, Chorus Master **

[コンサートマスター] 崔(チェ)文洙/伝田正秀

Munsu Choi and Masahide Denda, Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催：すみだトリフォニーホール

■特別協賛：オリックス株式会社/公益財団法人オリックス宮内財団

■助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
独立行政法人 日本芸術文化振興会

アラム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

演奏会アンケートは
こちらから
<https://www.njp.or.jp/qs>



オリックス株式会社
公益財団法人 オリックス宮内財団



Profile



©Takashi Iijima

佐渡 裕 [指揮] Yutaka Sado, Conductor

京都市立芸術大学卒業。故レナード・バーンスタイン、小澤征爾らに師事。1989年ブザンソン指揮者コンクール優勝。これまでパリ管弦楽団、ロンドン交響楽団、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団など、欧州の一流オーケストラに多数客演を重ねている。現在ウィーンで110年以上の歴史を持つトーンキュンストラ管弦楽団音楽監督、兵庫県立芸術文化センター芸術監督、シエナ・ウインド・オーケストラ首席指揮者、「サントリー1万人の第九」総監督などを務める。CD録音は多数あり、最新盤としてトーンキュンストラ管弦楽団を指揮した21枚目のCD『マーラー：交響曲第7番』を2024年10月にリリース。著書に『棒を振る人生～指揮者は時間を彫刻する～』（PHP文庫／新書）など。出光音楽賞（1991年）、モンブラン国際文化賞（2003年）、渡邊暁雄音楽基金音楽賞（2003年）、岩谷時子賞（2014年）、文部科学大臣表彰（2024年）などの受賞歴がある。2023年4月より新日本フィルハーモニー交響楽団第5代音楽監督に就任。オフィシャルファンサイト <http://yutaka-sado.meetsfan.jp>



山川永太郎 [トランペット] (新日本フィル 首席トランペット奏者) Eitaro Yamakawa, Trumpet (Principal Trumpet, NJP)

青森県青森市出身。9歳よりトランペットを始める。青森商業高等学校、尚美学園大学音楽表現学科卒業。桐朋オーケストラ・アカデミー研修課程修了。第38回青森県新人演奏会、第34回ヤマハ管楽器新人演奏会金管部門に出演。小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクトXVI、セイジ・オザワ 松本フェスティバル：子どものための音楽会、PMF2021に参加。第24回コンセール・マロニエ21金管部門第3位。ソリストとして、仙台フィル、新日本フィルと共演。トランペットを内藤知裕、長谷川潤、ヒロ・ノグチ、亀島克敏の各氏に、室内楽を後藤文夫氏に師事。アニメやドラマ等の劇伴収録も多数参加。東宝ミュージカル「王様と私」にオーケストラメンバーとして参加。現在、新日本フィルハーモニー交響楽団首席トランペット奏者。劇団四季「アナと雪の女王」オーケストラメンバー。『AOMORI TRUMPET FIVE』主宰。ドルチェ東京・ミュージック・アカデミー講師。



中田憲吾
Kengo Nakata
[小学3年生]

特技
•あやとり
（あやとり教室指導員資格保有）
•折り紙



伊藤健司
Kenji Ito
[小学4年生]

特技
•ピアノ
•文芸全般
（絵本作り、詩作、作句等）

TOKYO FM 少年合唱団 [ボーイソプラノ] TOKYO FM BOYS CHOIR, Boy Soprano

1985年4月にFM東京の開局15周年を記念して誕生。ボーイソプラノならではの純粋な響きを追求し、小学生の男の子だけをメンバーとする世界でも希少な少年合唱団。活動の柱としている主催公演には、第一線で活躍する指揮者や演奏家をゲストに迎え、意欲的なプログラムに取り組んでいる。一方、国内外のオペラハウスやオーケストラからの出演依頼も多く、著名な指揮者や歌手の方々と共演する貴重な機会を得ている。また、様々なアーティストから依頼を受けて数々のCD録音に参加しているほか、CMにも出演するなど、その活動は多岐にわたる。2025年に創団40周年を迎える。指導：林 ゆか



©Yuji Hori

キウ・ウォン・ハン [バリトン] Kyu Won Han, Baritone

韓国・ソウル出身。マンハッタン音楽院で学士号、修士号を取得。ベルヴェデーレ国際声楽コンクール、ブッチーニ・アラネーゼ国際コンクール他多くの受賞歴を持つ。1999年サンフランシスコ歌劇場『ドン・ジョヴァンニ』マゼット役でデビュー。2001年フランス国立ライン・オペラ『トゥーランドット』ピン役でヨーロッパデビュー、同年3月新国立劇場『魔笛』パバゲーノ役で日本デビューを果たす。その後サンフランシスコ・オペラ、ポルドー歌劇場など各国で活躍し、近年はアイダホ・オペラ『カルメン』『マクベス』に出演。国内では佐渡裕、広上淳一、C. アルミンからの指揮で兵庫芸文管、京響、新日本フィル、日本センチュリー響、札幌などにソリストとして出演。韓国では大河ドラマ『大王世宗』の主題歌を歌うなど絶大な人気を博す。滑らかで高貴かつ力強い質感のその声は賞賛され、圧倒的な存在感で国内外の多くのファンに愛されている。エイベックス・クラシックスよりCD『Questo Amor～この愛を』をリリース。

栗友会合唱団 [合唱] Ritsuyukai Choir, Chorus

栗山文昭を音楽監督兼指揮者とする混声4団体、女声6団体、男声2団体で構成されている。各団が独自に定期演奏会、演奏旅行、レコーディングなどを行いながら、「栗友会」としても活動を重ねている。NJPとも、歌劇『ローエン格林』、歌劇『ペレアスとメリザンド』、楽劇『トリスタンとイゾルデ』、シュミット「七つの封印を有する書」、マーラー：交響曲第2番、第3番、第8番「千人の交響曲」、ブリテン「戦争レクイエム」、ドヴォルジャークおよびロッシニの「スターバト・マーテル」、オルフ「カルミナ・ブラーナ」、ハイドン「四季」、ブラームス「ドイツ・レクイエム」など数多く共演している。

栗山文昭 [合唱指揮] Fumiaki Kuriyama, Chorus Master

島根県に生まれる。指揮法を高階正光、合唱指揮を田中信昭に師事。第20回中島健蔵音楽奨励賞受賞。2015年度下総皖一音楽賞受賞。現在「栗友会」の音楽監督及び指揮者として活躍する傍ら、一般社団法人音楽樹の芸術顧問として「Tokyo Cantat」などの企画・プロデュースに携わる。現在、武蔵野音楽大学名誉教授、島根県芸術文化センター「グラントワ」いわみ芸術劇場芸術監督。

Program Notes ● 小室敬幸 [音楽ライター]

クロード・ドビュッシー（1862～1918）とモーリス・ラヴェル（1875～1937）に続く世代で、とりわけラヴェルの新古典主義的な要素を引き継いだのが「フランス六人組」である。彼らはエリック・サティ（1866～1925）を精神的な父、詩人ジャン・コクトー（1889～1963）を精神的な兄と慕うグループだった。ところが中核メンバーとされることの多いアルテュール・オネゲル（1892～1955）はワーグナーを愛するロマン主義者で、サティとは折り合いが悪かった。モデルになったロシア五人組と異なり、歩んでいく道を強固に共有しているわけではなかったのだ。「フランス六人組」とは若い作曲家たちを売り出すため、戦略的に貼られた“ラベル”だったのである。

■ イベール：室内管弦楽のためのディヴェルティスマン

六人組と同時代に ▶ フランス六人組が生まれる上で母体となった新青年派に属していたジャック・イベール（1890～1962）も、六人組のメンバーになっていてもおかしくない作曲家だった。特に本作は、時に大胆な不協和音も登場するのでイベールのなかでも特に六人組に近い作品だとみなされることが多いようだ。日本語に訳せば嬉遊曲という意味になるディヴェルティスマンは、演劇の伴奏音楽がもとになっている。

劇の付随音楽として ▶ 劇作家ウジェーヌ・ラビッシュ（1815～88）の戯曲『イタリアの麦わら帽子』（1851年初演）は、現在まで上演され続けている風刺的な喜劇（ヴォードヴィル）。1928年に公開されたルネ・クレール監督のサイレント映画（日本では『イタリア麦の帽子』という邦題で1961年に公開）としてご存知の方もいるかもしれない。

馬車で結婚式へと向かう新郎は、落とした鞭を拾おうとしている間に、馬が街路樹に首をつっこんでつけた麦わら帽子の一部を食べてしまう。実はこの帽子、木々に隠れて逢引きしていた人妻のもの。これがないと不倫が露見してしまうようだ。焦った不倫相手の中尉は結婚式場を脅迫。更に、店へと駆け込むも同じ帽子は既にも買われていたので、その買い手を探す……というドタバタ喜劇である。1929年9月にアムステルダム市民劇場で上演される際にイベールが付随音楽（劇伴）を作曲。翌年、それを組曲のようにまとめ直したのが「ディヴェルティスマン」だ。物語に合わせて、第2曲「行列」ではメンデルスゾーン「結婚行進曲」が引用されたり、第6曲「終曲」では警察所で大騒ぎになる様子を、警笛を用いたりして表現している。

[楽器編成]フルート(ピッコロ持替)、クラリネット、ファゴット(コントラファゴット持替)、ホルン、トランペット、トロンボーン、ティンパニ、小太鼓、ウッドブロック、大太鼓、吊しシンバル、タンバリン、タムタム、ホイッスル、ピアノ(チェレスタ)、弦楽4部。

■ アルチュニアン：トランペット協奏曲

ハチャトゥリアンに
評価され

西はトルコ、南はイランに接しているアルメニア共和国。1991年に独立するまではソ連に編入されていたため、現在はアルメニアの作曲家として紹介されることの多いアラム・ハチャトゥリアン(1903~78)も、存命中はソ連を代表する作曲家として名を馳せた。そのハチャトゥリアンが1957年におこなわれたソヴィエト連邦作曲家同盟の第2回総会において、囑望される作曲家のひとりとして挙げていたのがアレクサンドル・アルチュニアン(1920~2012)だ。彼はアルメニアの首都エレヴァンに生まれ、当地の音楽院とモスクワ音楽院で作曲を学んだ。91歳で亡くなるまで、アルメニアの民族音楽を取り入れた数多くの作品を遺したが、圧倒的に演奏機会が多いトランペット協奏曲が代表作として知られている。

作曲の経緯▶

この曲の第1主題は1943年、彼がエレヴァン音楽院の学生時代に作られたもので、少年時代から知り合いであったエレヴァン歌劇場のトランペット奏者ツォラク・バルタサリアンに聴かせたところ、大変この旋律を気に入り、協奏曲を書くように進言した。その年にバルタサリアンは戦死してしまうのだが、その構想を1950年に実現させたのが本作であるというわけだ。作品は初演したエレヴァン音楽院教授のトランペット奏者アイカズ・メシアヤンに献呈されているが、その後、ボリショイ劇場の首席トランペット奏者ティモフェイ・ドクシツェルがカデンツァを加えて演奏・録音したことが広く知られるきっかけとなった。

曲の構造と
音楽の特徴▶

変則的なソナタ形式とみなすことが出来る単一楽章だが、続けて演奏される5つの部分によって構成される。第1部(Andante - Allegro energico)は序奏とキャッチーな旋律による第1主題、テンポの落ちる第2部(Andante)は郷愁を感じさせる第2主題だ。再びテンポが速まる第3部(Allegro)は展開部で、最終的に序奏の旋律がショスタコーヴィチ風に響いてクライマックスを築く。そのまま再現部に突入するかと思いきや、もう一度テンポが落ちる第4部(Meno mosso)へ。弱音器(ミュート)をつけたトランペットが吹く哀愁豊かな旋律は、序奏のメロディを変奏したものとみなせそうだ。第5部(Allegro)でやっと再現部へ。序奏の

メロディと第1主題だけが再現されたのち、総譜(スコア)では2小節ほどしかない無伴奏トランペットの部分にカデンツァを挿入することが多い。

[楽器編成]トランペット独奏、フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、小太鼓、トライアングル、ハープ、弦楽5部。

■ フォーレ：レクイエム op. 48 ※歌詞対訳は14~16ページをご覧ください

サン=サーンスの弟子で、ラヴェルの師匠にあたるのがガブリエル・フォーレ(1845~1924)だ。若い頃は声楽曲ばかり創作していたが、サン=サーンスの影響を受けて作曲したヴァイオリン・ソナタ第1番(1875~76)以来、室内楽でも多くの傑作を手掛けていく。対してオーケストラ作品には苦勞したようで、未完で遺されたものも少なくない。

作曲、改訂の経緯▶

1887年に書きはじめられたこの「レクイエム」について、フォーレは具体的な人物への追悼ではないと書き残しているが、1885年7月に父が、作曲中の1887年12月に母が亡くなった経験が無関係とも言い切れないであろう。1888年1月に初演された第1稿ではまだ「オッフエルトリウム」と「リベラ・メ」が存在しておらず、編成に管楽器は含まれていないし、ヴァイオリンセクションも欠いていた。1893年版とも呼ばれる第2稿で全7曲になり、金管楽器とバリトン独唱が加わった。本日演奏される第3稿は1900年7月に初演されたもので、木管楽器とヴァイオリンセクションが加わった通常編成の管弦楽に仕立て直されている。

各曲の特徴▶

第1曲「イントロitusとキリエ」と第2曲「オッフエルトリウム」はどちらも悲しみに満ちているが、第2曲でバリトン独唱が「主よ、私たちはあなたに賛美のいけにえと祈りとを捧げます」と歌い出すと少しずつ雰囲気が変わってゆく。その流れを拡大していく第3曲「サンクトゥス」では力強さを得て、第4曲「ピエ・イエス」はソプラノ独唱(今回はボーイソプラノ)が感動を誘う。安息を祈る第5曲「アニユス・デイ」を経て、第6曲「リベラ・メ」で再びバリトン独唱が登場。死を象徴する“怒りの日”についても歌われて不安が募るが、最終的に明るく落ち着いた第7曲「イン・パラディスム」へと辿り着く。死を苦しみからの解放と捉えていたフォーレの死生観を反映しているのであろう。

[編成]フルート2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、ボーイソプラノ独唱、バリトン独唱、混声合唱、ハープ、オルガン、弦楽5部。